〔書　評〕

大坪併治著『訓点資料の研究』

築島　裕

大坪併治博士の大著「訓点資料の研究」は、平安時代の許多の訓点資料の中から、高野山竜光院所蔵の「妙法蓮華経」七巻（巻第三欠）の明算（一〇二一―一一〇六）加点本と、天理図書館及び京都国立博物館分蔵の「南海寄帰内法伝」三巻の平安後期加点本の二種の点本を取上げ、それぞれ全巻の訓点附本文の写真を上段に、その訓点の訓下し文を下段に配して、上下対照し得るやうにし、更に、各資料別に訓点の研究を論述して、その大要を記述的に紹介されてゐる。

本文の写真は網目版であるが、比較的鮮明である。妙法蓮華経は、今回始めて写真版で刊行されたものであるが、原本には白点が入念に加点されてをり、料紙が雘紙で有色であることと相俟つて、写真は非常に明瞭である。南海寄帰伝の写真は、漢字ははつきりと読取ることが出来、墨点の仮名は辛うじて読めるが、朱点は殆ど解読不能である。これはかやうな写真版としては致し方無いことであり、巻第二及び巻第四は、既刊のコロタイプ複製本があるから、それを参照することも出来るが、巻第一は、今回始めて全巻が写真版で刊行されたものであるから、惜しまれることである。しかしコロタイプ版が極めて高価である現在、止むを得ないことと考へねばならないであらう。

訳文は、原本の仮名を片仮名で、ヲコト点を平仮名で、解読者の補読は（　）に包んで表記されてをり、春日政治博士以来の斯界の方針に適つている。原本の張数と行数（行数は五行毎に誌す）とを注してある。南海寄帰伝の巻第二については、現存本に錯簡あることを指摘され、正しかるべき順に修正されてゐる。

訳文・索引篇は今回始めて公刊されたものであるが、研究論考篇は、著者が以前に島根大学論集（人文科学）に「㊢国南海寄帰内法伝の訓点」（第五号、昭和三十年二月）及び「竜光院蔵妙法蓮華経の訓点」（第十六号、昭和四十一年十二月）として世に問はれたものを基として、それに大きく手を加へられたものである。研究編は両編とも、概説・ヲコト点・仮名・漢字の義注・音韻・特殊な漢字の用法・文法・語彙のやうな項目を立てて論述されてゐる。ヲコト点・仮名は極めて精密に帰納されてゐる。殊に法華経の場合、そのヲコト点は中院僧正点であるが、この点を加へた点本で纏つた量のあるものは他に少く、従つて本研究において実際の点本から周到に帰納

されたヲコト点図は、中院僧正点の夙い時期の形態を示すものであつて、この意味からしても、この業績は極めて貴重である。点図集所載の中院僧正点は、本古点と異る所が多い。星点の壺外にあるもの（ス・ヨ・リ・モ等）は点図集には見えないが、本古点の如きが正にこの点の原初形態であることは、高山寺蔵本大日経疏康和五年点所用の中院僧正点なども、本点と同形態であることなどと考へ合せて、明かである。（因に康和五年点の点者は、本点本の点者明算の孫弟子快与（誉）である。）

これに対して、音韻・文法・語彙等の項目については、何れも問題点を摘出する形が取られてゐて、必ずしも全体的・体系的には捉へられてゐない。自明のことは省略に従ふといふ趣旨から出られたものとは思ふが、この二点の点本を、数多の点本の中から特に取上げられた以上、もう少し体系的な論点も欲しい所であった。例へば国語音・漢字音の音韻体系、代名詞の語彙・動詞・形容詞の活用の体系など。しかし、全体として、学界未知の重要な資料を新に提供し、多くの新考を披瀝して、学界を益せられる所大きいものであることは、言ふまでもなく明な事実である。その多くの新考の中、殊に顕著なものを若干取上げて見たい。

一つは、「喪」にホロヒ〳〵と附訓されたものについてであつて、実は「ホロヒくたり」であつて、くは助動詞ムの音便でなく、ヌの連用形ニの音便であることを明にされたことである。これは従来国語音韻史上の重要な例とされてゐたもので、その誤読であることを指摘して正しい訓法を示されたことは、大きな意義があるとせねばならない。この点は既に小林芳規氏も「国語と国文学」（昭和四十四年七月号）誌上の書評でも触れられてゐることであるが、私としても是非揚言しなければならないことである。

妙法蓮華経古点で、「尊敬の助動詞」にル・ラルが使用されてゐる（「見」の字の訓として）ことも、重要な報告である。「見」字の、漢文における用法についても、知りたいことが多いが、とにかく、従来訓点本には見られないとされてゐたこの語が、かやうに数例も報告されたことは、注目すべきことである。

語彙の考証に関しても、従来知られなかつた珍しい語彙を多く紹介し、豊富な傍証によつて論述されてゐる。法華経古点のヌレスケ、ノヅチ、ヒラム、ミヅハ、南海寄帰伝古点のアヲビエ・イウツス・イサ（シ）ム・ウツラ・カヒロク・カワ・コトウケ・タカバカリ・チキリカウブリ・ツツセシ・ナフサナフサ・ナメツキ・ナモミ・マヘダレ・マメツキ・ヤガタグルマ・ヤワフなどはその例である。

本書によつて教示を受けた所は極めて多いのであるが、読み進んで行く途中で、私なりに抱いた疑問又は小見が若干ある。それを次に述べたいと思ふ。

〔妙法蓮華経古点〕

三一一頁に明算大徳の事蹟について、竜大の仏教大辞彙から説明を引用されて済まされてゐるが、高野春秋・血脈類聚記その他多くの原史料に直接基いて更に詳論せらるべきではなかつたか。このことは本古点の資料的性格を究明する為に必要なことのやうに思はれる。即ち、明算は、経典によつて自らの見解に基いて新に加点した場合と、先学から訓法を承継いだ場合とがあつたらしいことは、大坪博士の推測された（三一一頁上）通りであらうと思ふが、このやうな事情が何故に生じたのか、又、それが訓点史上、どのやうな意味

を持つかについての著者の見解を承りたい所である。なほ、「大毗盧遮那経供養次第法疏」を「大日経疏」と略称してをられる（三一一頁下）が、一般に「大日経疏」は「大毗盧遮那経疏」の略であって、別々の本であるから、この略称は如何であらうか。

三一三頁のヲコト点の精緻なことは前述の通りであるが、朱点のヲコト点について、星点は三論点と全同の趣を述べられてゐるが、示された点図によると、壺の外方に右上にシ、右下にタがあり、かやうな壺外の点は、平安初期の大唐三蔵玄奘表啓古点にもその例があり、又、中院僧正点にも例がありながら、ヲコト点全体としては必ずしも多くはないことであり、この朱点のヲコト点が星点以外は全く独自なものであることとも考へ合せて、点法史上注目すべき資料のやうに愚考する。

音韻の項で、ヲコト点を資料として、例えば「除をく」「起をきて」などをオとヲとの混同の例として示されてゐるが、理論的には、「お」「を」二種のヲコト点が使ひ分けられてゐるのでない限りは、これは立論の根拠としては弱いのではないか。少くとも二次的傍証の地位しか与へられぬのではないかと思ふ。因に三二〇頁下の「ワをハとするもの」の項では「圯ヒハレ」（二12―3）もこの例に加ふべきものの如くである。又同頁の〔ヰ〕〔ヱ〕の〔ヱ〕は、どのやうな根拠で使用されたものか、その理由を伺ひたいと思ふ。又三二一頁上の「済ワタて」「挙コソて」「無かっ」など、ヲコト点を援用したものを、促音便の例とされたのは如何であらうか。「ワタ（リ）て」「（ナ）か（リ）つ」などの「（リ）」の省記ではないといふ保証が無ければ、促音便の例とはなり難いのではなからうか。

三二四頁以下の「当」「将」などの再読字、又は「豈」「況」などの虚字類の訓法については、既に小林芳規氏などの論も多いのであるが、それら他の研究とどのやうに関り合ふのか、殊に小林氏の言はれる、虚字訓法の史的変遷の中でこの点本の例をどのやうに位置づけようとされるのか、明言されて欲しかつたと思ふ。因に三二四頁下に「欲をす」をオモホスと訓ぜられてゐるが、オモホスの語は当時既に一般には用ゐられなくなつてゐた語かと考へられる。

三三三頁上段に、本点にダモのみあつてスラの見えぬことを指摘され、更に「大日経天喜点にもダモだけでスラはないから、明算はスラを用ゐず、ダモで通したといふことになりさうである」と述べられてゐるが、大日経は明算自身の点ではなく、小野阿闍梨成尊から受学した大師御点本によつた点であるから、この叙述は妥当でない。上に大坪博士が「大日経と大日経疏は、先学の訓法に従ひ、法華経は自らの訓法によつた結果なのであらうか」とする論との間に一貫性を欠くやうに思はれる。

〔南海寄帰伝古点〕

南海寄帰伝の古点の基本点が、宝幢院点であることは、既に中田祝夫博士の指摘された通りであるが、それが天台宗の、然も比叡山系統の学侶の所用の点であることもまた、中田博士の明にされた所である。これに対して、同じ本書に加へられた別点のヲトコ点のあることが木下正俊氏によつて指摘され、その点が西墓点であることを論ぜられた。大坪博士も、それによつて、西墓点と認定されてゐる。所で、中田博士によると、西墓点を使用したのは天台宗でも寺門派三井寺の系統の学僧であり、山門派の比叡山とは別流であつた。このことは、当時の古点本を見渡して考へても、全く正当な考察であると愚考する。然るに、この本に於て両者が併用されてゐる

（大坪博士は、西墓点が先で宝幢院点は後と見てをられる〈三五七頁下〉）ことについては、何等かの説明が必要である。私に案ずるに、この別点は、全く星点のみであつて、線点の類は用ゐられてゐない。これを（仁都波迦点に非ずして）西墓点と認定されたのは、星点の右中央がシであつて、これが西墓点の特徴であり、ここがトであれば仁都波迦点である筈だから、区別し得ることと、中央右下寄の星点のミが西墓点に合致することによつたものと思はれる。然るに、仁都波迦点も、その初期には右中央がトでなくて西墓点と同じくシであつたやうであり、（築島裕「平安時代語新論」五一頁）又中央右上寄の星点は、一本によればミであつたとも考へられることであつて、少くともこの星点だけからしては、これを「西墓点」と断ずることは難しいのではないか。私は寧ろ「第一群点」（テヲニハ点）の一種と見たい。第一群点に属する諸点が叡山で用ゐられてゐたことは、中田博士も指摘されてゐる通りであり（「古点本の国語学的研究総論篇」二六九頁・四七七頁）、私も論及したことがある。（上掲書五四頁）又宝幢院点と第一群点とが併用されてゐる点本には、菩提場所説一字頂輪王経（宮内庁書陵部蔵）（承保二年〈一〇七五〉識語）があることも、中田博士により指摘されてゐる通りである（前掲書）。以上の如き理由から、私は、この別点は、第一群点の一流であつて、宝幢院点と併せ用ゐられてゐた叡山の点であつたのではないかと見たいのである。

三六一頁にスの仮名の字体に一を用ゐてあることを取上げ、西墓点に特有の字体であることを、曽田文雄氏の論を援用して説かれたが、これは既に春日政治博士の論にもある如く、（片仮名の研究五〇頁）円堂点の点本で院政時代以後まで伝へられたものであり、必ずしも西墓点特有のものとは考へられない。平安後期頃までは一般に行はれてゐたものと見るべきではないか。

三六八・三六九頁で、蛹をヨム、控をクと記したのを「誤」とされてゐるが、この資料の内の他の多数の例と比して例外的であるといふのならば判るが、ŋをム、uをクで記した例は、他文献にも見えるのであり、単なる表記の不統一と見ることも可能であつて、直に発音の混同とすることは如何であらうか、因に「羯ヨ・」の・は省筆符号と見てをられるが、舌内撥音尾nと及び舌内入声尾tの表記に・を用ゐた例も他にあること故、（「平安時代語新論」四一七・四二〇頁）tの表記形態の一と見ることも可能ではなからうか。

三七〇頁に「褌クキニ」「脣スキニ」等を「無理に合拗音化した」とし「脣はシュンまたはシンとあるべきであらう」と述べられてゐるが、この種の合拗音表記は寧ろ当時の通例であり、「シュン」などは寧ろ比較的新しい形なのではないか。

三七五頁に拙著を引用されて「除」に朱でコリテとあることを言われた所で、私の訳文ではヨリテと読んであるとされてゐるが、訳文の注でも、索引でも、「（ノゾ）コリテ」とも考えられる趣を私は述べておいた。

三七六頁に挙げられた、和訓の声点について用例を集め、類聚名義抄の声点の例を併掲されてゐる。私見によれば、恐らく両者共通の体系に基くものと思はれるが、活用形の異同などもあり、それについての御見解も伺ひたかつた所である。因に本点が単点・のみであつて、濁点の無いことは、声点の発達史上、比較的夙い段階を示してゐるのではないかと思はれる。

三八一頁に「然後」をシカシテノチと訓むとされてゐるが、私の

知る限りではシカシテノチといふ訓法は比較的後であり、古くはシカウシテノチではなかつたかと思ふ。

三八五頁に「被ニ他ニ挙ヲ罪ヲ」のアケイハのイハを誤点かとされているが、「挙げ言ふ」という動詞の未然形と考へることは出来ないであらうか。

三八七頁に動詞カカハルの下二段活用を「誤用」とされてゐるが、この活用形式が当時一般的であつたことは既に明かであつて（「平安時代の漢文訓読語につきての研究」六〇〇頁）これを誤用と見るのは如何かと思ふ。

四〇二頁、イウツスの語を、ウツスに接頭語のイを添へたのであらうとされるが、イは上一段活用動詞イルの連用形と見得るのではないか。又同じ頁に挙げられた「遣…授」のイサシムの語も、イルの派生語と見ることが許されるのではないか（正しくはイシムとあるべきであらうが）。

四〇三頁に「殄」字の義釈に解纜抄を用いられてゐる。勿論この本の注釈書として言及されるのは当然であるが、若し字義の解明を目的とするならば、例へば新撰字鏡（天治本）に「殄徒典反痛也尽也絶也」（十一ノ七ウ五）などを援用されてよいのではないか。

四〇三頁、「窆」のウツムはウヅムであって、埋葬した意なのではないか。

四〇七頁、スルドナリのことについては、既に山田忠雄氏の詳論があることに言及されて然るべきではないか。

四〇七頁、「畔」字の訓としてタトリを挙げておられるが、私のノートではホトリと訓取つている。卩の字体がタに近く見えた為にこのやうに訓まれたのではないか。

この他、本文の方で、「慇懃」の訓「ネ・・・」を「ネモコロ」と補読されてゐるが、この時代としてはネムコロの方が一般的ではあるまいか。

以上、思ひつくまゝに愚見を述べ連ねて来た。却つて当を失した妄言も多いかと懼れてゐる。その際は何卒著者並に学界各位の御海容御叱正を仰ぎたい。

最後に、要職の劇務の中に在つて、能くかやうな大作を完成された大坪博士の御精進に深い敬意を表し、向後の御健康と御発展とを祈り奉るものである。

（A5四一六＋四八頁、昭和四十三年六月十五日、風間書房刊、九八〇〇円）

—東京大学助教授—